

タイトル	送別の辞：白雲は尽くる時無からん(岡田宏明,永井秀夫,橋本雄一教授の退任にあたって)(退任教員紹介)
著者	菱川, 善夫
引用	北海学園大学人文論集, 19: 140-142
発行日	2001-07-31

[岡田宏明、永井秀夫、橋本雄一教授の退任にあたって]

送 別 の 辞

——白雲は尽くる時無からん——

菱 川 善 夫

岡田宏明、永井秀夫、橋本雄一の三教授が、本学の定年規定により、2001年3月をもって御退任されることになりました。北海学園大学の発展のため御尽力いただいた御功績はまことに大きく、御芳名はあまねく天下に知れわたっております。特に1993年(平成5年)の人文学部開設にあたっては、特段の御協力を賜りました。爾来7年間苦難をわかちあった一人として、御退任に際し、心からの感謝を捧げたいと存じます。

在任期間中、岡田宏明教授は、アメリカ・インディアンやイヌイットなど、北方民族の伝統文化に関する長年の調査研究を背景に、「比較文化論」、「米国文化論」の講義を、英米文化学科で御担当いただきました。

永井秀夫教授は、自由民権運動、憲法体制に関する豊富な学識をもとに、明治国家形成期における日本近代化の問題を核心に据えた「日本近代史」と、北海道の内国化や移住政策を見すえ、辺境からの視座を問う「北海道史」を、日本文化学科で御担当いただきました。

また橋本雄一教授は、御自身が詩人である柔軟な感性を駆使し、T.S.エリオットやエズラ・パウンドによる「モダニズム」派と、フィリップ・ラーキンの「ムーヴメント」詩派の研究に新生面を開かれ、その実績をふまえ、英米文化学科で「英米文学史」、「英文学」の講義を中心に御指導をいただきました。

三教授の豊富な経験と該博な知識、ならびに魅力的な御人柄による講義と演習は、学生の心に深く浸透し、人文学部がモットーとして掲げる「新人文主義」の実践として、高い評価を得てまいりました。学問と人間の一体化をめざす高等教育は、理念だけが先行しては、地についた成果を

あげることができず、かといって教育労働に終始しては、新たな研究の扉を開くことができません。その両者の融合に、われわれは人文学部の基本的理念を設定しましたが、その実現にあたって、岡田、永井、橋本三教授から賜った恩恵は、はかり知れないものがあります。学部の完成とともに、すみやかに日本文化専攻の大学院、文学研究科の発足を実現させることができたのも、その成果があつてのことです。その御努力に対し、前文学研究科長として、あらためて感謝を申しあげる次第です。

盛唐の詩人王維に「送別」と題する詩があります。

下馬飲君酒 問君何所之
君言不得意 歸臥南山陲
但去莫復問 白雲無盡時

馬より^お下りて君に酒を飲ましめ
君に問う ^{いづ}何くにか^ゆ之く所ぞと
君は言う 意を得ず
^{なんざん}南山の^{ほとり}陲に^き歸臥^がせんと
^た但だ去れ ^ま復た問うこと^な莫けん
白雲は尽くる時無からん

く並んで歩ませた馬を下り、別れの酒をすすめて私はたずねる。君はどうするかと。君は答える。世は思うようにならない。よって南山に帰るのだと。では行け。南山に白雲は尽きることなく湧きおこっているだろう。〉

どんなに努力をしても、去りゆくものの胸中に湧いてくるのは、「意を得ず」の思いであることを、この詩は語っています。小さな自己満足に甘んじなければ、必ずやってくる感慨であろうと思います。退任される三教授の胸中に去来するものも、この詩の中の旅立つ友の心境に近いのではないかと推察致します。

しかし王維は、詩の最後を「白雲は尽くる時無からん」で結び、その一句に万感の思いを託しました。学問に終わりはありませんから、御退任後も、おそらくこの王維の詩のように、研究への情熱が、白雲の尽きることなく湧きおこってくることと思います。王維の詩には、俗界から離れた山中の世界へのあこがれが息づいていますが、三教授には、それぞれの分野での社会活動が待っていますので、すぐさま南山に引きこもるということは困難なことでしょう。が、時に白雲とともに酒をくみ、陶然として自在の境地に遊ばれることを願ってやみません。

「白雲は尽くる時無からん」の一句を御贈りし、送別の言葉とさせていただきます。

2001年6月3日

菱 川 善 夫